横浜ユーフォニアム合奏団東京公演プログラム付録　２０２１年１１月１５日

日本のユーフォニアム発祥の地、横浜と歴史的なユーフォニアムの名称について

時は幕末、生麦事件が起きた文久２年（１８６２年）に、幕府により西洋式陸軍が創設されました。元治元年（１８６４年）に英国陸軍が横浜に駐屯し、軍楽隊の演奏が行われ、慶応元年（１８６６年）幕府はフランスの将校から信号ラッパの伝習を受けています。明治元年（１８６７年）英国第１０連隊第１大隊軍楽隊長としてフェントン（John William Fenton）が横浜に着任しました。フェントンは後に初代「君が代」を作曲したことで知られています。翌明治２年（１８６９年）に我が国最初の吹奏楽団、薩摩藩軍楽隊が結成、横浜、本牧の妙香寺においてフェントンの指導を受けました。彼は32名編成のバンドを編成し、英国のディスティンを仲介として、ロンドンの楽器店に楽器一式を発注しました。この楽器が到着するまで、洋式に作った日本製の横笛、ラッパ、太鼓等の教育が行なわれています。この年に戊辰戦争が終結、版籍奉還が行われました。

翌1870年7月31日(旧暦明治3年7月4日)、待望の楽器を積んだ船が横浜港に到着しました。さらに日本海軍の創設者川村純義は、フェントンを通じてロンドンのベッソン社に楽器購入を依頼し、1870年12月17日に横浜港を出港する船に、吹奏楽器2組、64 点の楽器購入代金の前金1500ドルを託しています。これが英国への2度目の注文で、この楽器は翌明治４年（１８７１年）に横浜港に到着しました。この年に廃藩置県が行われ、薩摩藩軍楽隊は鹿児島に帰りましたが、海軍に出仕した隊員も多く、翌明治５年（１８７１年）には陸軍と海軍が分離し、陸軍軍楽隊と海軍軍楽隊が発足しています。

話は戻りますが、薩摩藩軍楽隊の最初の伝習生に森山孫十郎という鼓手がいました。残念な事に明治3年1月12日に横浜において病没しました。英国から最初の楽器が到着する前の話です。その墓前に当時の隊員の名前と献辞が彫られた献灯が建てられました。この献灯には30名の名前が認められますが、この最初の伝習生達の担当楽器について後年研究が行われ、明治4年に海軍楽手として入団した折田徳道に依頼し、当時の記憶から隊員名簿が作成されました。この隊員名簿の一覧によると、「尾崎惟徳　中位大ナル楽器ニシテ(ユーホネン)ト稱セシナラン」と読む事が出来る人物がいます。また、海軍軍楽隊初代軍楽長の中村祐庸の遺録によりますと、「伝習生人名　ユーホーニオン　尾崎平次郎」との記載があります。これらの資料から、英国より日本に初めてやってきた吹奏楽の楽器一式の中に、「ユーホネン」「ユーホーニオン」と呼ばれた楽器が含まれていたことが明らかになっています。

さて、この「ユーホネン」「ユーホーニオン」などと呼ばれた最初の英国製の楽器購入の話になりますが、この取引を仲介したとされる英国のディスティン社は、1845年にロンドンで店を構え、翌年より英国内におけるサクソルン(Saxhornベルギーのアドルフ・サックスが考案した一連の金管楽器）の代理店になっています。

1850年よりディスティン社はサクソルンの委託生産をしていたのですが、アドルフ・サックスと経営方針が合わず、1857年頃にこの契約を解消し、以来ディスティン社のカタログからサクソルンの名前が消えて、上向きベルの金管楽器（おそらく現在フランスでサクソルンバスと呼ばれている楽器、小バス）に「Euphonion」という名称を対応させています。これに対抗するために、アドルフ・サックスは自身が制作し

たサクソルンを英国に持ち込み、サクソルンで統一された金管の楽団を結成、これが今日の英国の金管バンド（ブラスバンド）として発展しています。

1868 年にディスティン社は英国のブージーに買収されて、ブージー社(boosey & co.)が金管楽器の生産を引き継ぐ事になりました。薩摩藩軍楽隊の使用する楽器の注文をディスティンに出したのがこの翌年の 1869 年ですから、楽器の生産はブージー社に引き継がれています。その後、1874 年にブージー社の楽器開発者によって、現在の私達の使用するユーフォニアムに装備されているコンペンセイティングバルブシステム（セミダブル方式）が発明されました。1940 年にブージー社はベッソン社と合併し、現在はベッソンブランドとして足跡を残しています。1984 年には我が国初のセミダブル方式の国産のユーフォニアムがヤマハから発売されました。

話が進みすぎました。フェントンに話を戻しますと、この後フェントンは明治５年に海軍軍楽隊、明治７年に宮内庁楽部のお雇い外国人となり、軍楽隊の隊員、雅楽を演奏する伶人に欧州楽（吹奏楽編成）を伝えています。当時の宮中の記録から、「ユーホー子ン（子は子年、ねずみ年の子です。ユーホーネン）」「ヒー、フラット、イウフヲニアン（フは小文字の表記）」などの楽器名の記載を読み取ることができます。

翌明治８年に西南戦争が起こり、海軍軍楽隊は鹿児島に派遣され、城山の西郷軍に惜別の演奏を送っています。この後、海軍軍楽隊は明治１２年にお雇い外国人としてドイツ人のエッケルトを雇い、エッケルトは明治２０年に宮内庁楽部に雇われています。この年に東京音楽学校が創設されました。海軍や宮中で使用する楽器は英国製のまま、楽器の呼び方はドイツ式となり、「ユーホニオン」などの英国式の名称とドイツ式の「バリトン」の名称が混在し、また、フランス式を採用した陸軍軍楽隊の「小バス」などの名称の使用も相まって、様々な名称が国内に共存することになりましたが、異なる国のシステムを導入したために、楽器の名称だけでなく、演奏する楽曲やパート譜の記譜法も異なり、奏者間の交流も容易にはできないという事態が起こりました。このような状況ではありましたが、日清日露戦争を背景に国内の業者が金管楽器の製造を初め、明治４２年（１９０９年）三越少年音楽隊が民間の吹奏楽団として発足し、国内各地でこのような百貨店がスポンサーとなる民間の団体が相次いで発足しました。三越音楽隊は第１次世界大戦中の大正４年（１９１５年）に、日比谷公園音楽堂で「ユーホニオン・ソロー・セリア」を演奏しています。このあと大戦景気に沸いた日本でしたが、大正１０年（１９２１年）原敬首相が東京駅頭で暗殺され、時代は軍国主義へと向かいました。同年、日比谷公園音楽堂で東京派遣海軍軍楽隊が「セリア」（バリトン獨奏曲）を演奏しています。時代は昭和に入り、民間の吹奏楽団が設立され、各地で吹奏楽連盟が発足し、コンクールが開催されるなど、日本国内の吹奏楽の活動が徐々に盛んになりつつありましたが、満州事変や２・２６事件が起こり、戦時色が強くなると、次第に演奏活動は制限され、ついに第二次世界大戦の開戦と戦況の悪化で国内での吹奏楽の活動は停止を余儀なくされてしまいました。

昭和２０年（１９４５年）の敗戦により陸海軍の軍楽隊は消滅しました。昭和２６年（１９５１年）警察予備隊音楽隊が発足、翌年には海上保安庁音楽隊が発足しています。憲法９条と日米安全保障条約の締結を背景とし、自衛隊が創設され、昭和２９年（１９５４年）までに陸海空すべての自衛隊音楽隊が設立しています。各音楽隊は米国式の吹奏楽を導入し、戦前の英独仏の異なるシステムの併存という問題はここにようやく解決をしました。戦前の教育を受けた優秀な音楽隊員が復員し、様々な音楽活動を行う事で民間の洋

楽、スクールバンド（吹奏楽）が発展しました。１９６０年に安保闘争、所得倍増計画が発表され、昭和３７年（１９６２年）に東京藝術大学で初めてのユーフォニアムの卒業生（当時はバリトン科）として石崎一夫氏が同大を卒業しました。昭和４８年（１９７３年）に三浦徹氏が米国留学より帰国。プロの吹奏楽団の活動や音楽大学において吹奏楽の教育が盛んになり、「ユーホニューム」「ユーフォニウム」などの名称が共存する中、「小バス」「バリトン」の名称は次第に使われなくなりました。昭和５８年（１９８３年）に「音大卒業生によるユーフォニアム　デビューコンサート」の初開催、昭和６１年（１９８６年）の日本管打楽器コンクール「ユーフォニアム部門」の初開催など、民間の研究機関やプロの奏者たちなどが「ユーフォニアム」の名称を使用することが一般的になりました。そして近年はさまざまなメディアで「ユーフォニアム」の楽器名が広く一般国民に紹介され、ようやく私達は「ユーフォニアム」の楽器名を国内で統一された名称として使用する事ができる世の中になりました。

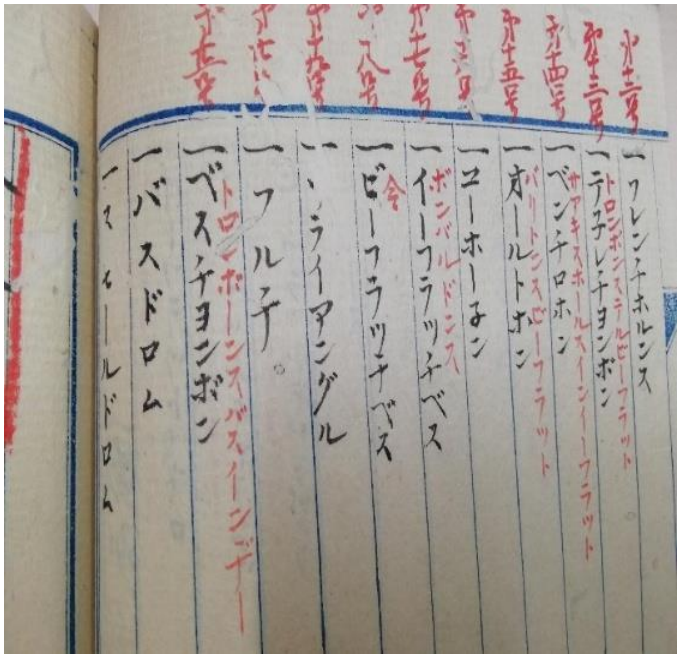
さいごに

横浜ユーフォニアム合奏団の主催事業としまして、筆者と清水唯一朗（政治史学者、慶応義塾大学総合政策楽部教授）、戸ノ下達也（洋楽文化史研究会会長、都留文科大学非常勤講師）両氏による鼎談「日本のユーフォニアム１５０年の歴史を考える」が２０２１年１１月５日に横浜山手・イギリス館において開催されました。穏やかな木漏れ日が差し込む洋館の一室で、筆者は両先生の物事の根源を見極める姿勢に心を打たれ、貴重な知見を得ることができました。幸せな時間が流れました。

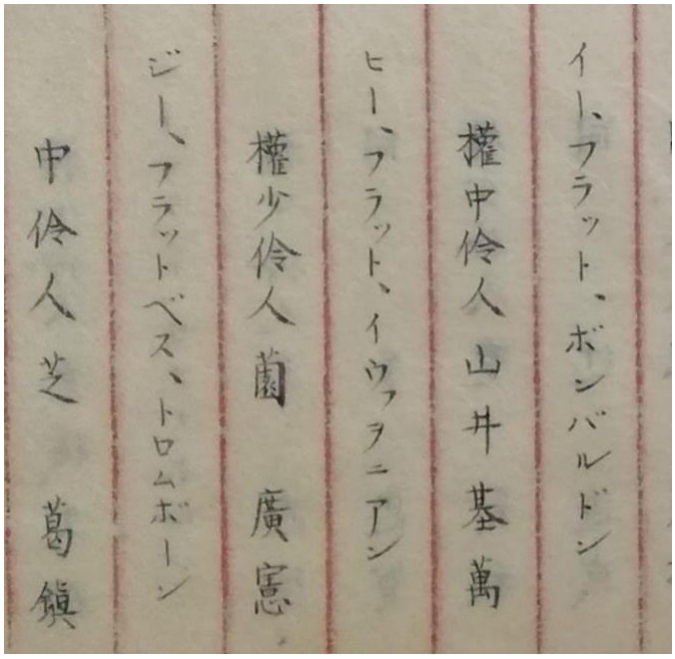
明治維新に際し、フランスの後ろ盾を得た幕府と、英国の後ろ盾を得た薩摩の関係が、そのまま陸軍と海軍に引き継がれましたが、第二次大戦の敗戦による両軍の消滅と、その後の憲法９条と日米安保による自衛隊の発足により、ユーフォニアムという楽器の名称の統一とともに、この問題はようやく終焉を迎えることになったと筆者は考えます。幕末から第二次世界大戦の敗戦までの７０数年間と、戦後が始まってから現在までの７０数年間と、ほぼ同じ時間が経ちますが、日本が国策として行った西洋音楽、吹奏楽の受容の歴史は、どちらも激動の時代と共にあり、ユーフォニアムの名称の変遷は、この歴史の事柄を映しだす鏡、そのものであると思います。７０数年間をかけて発展したものを、また一から始めるのではなく、さらに変化させながら一つのものに収束させるのも同じく７０数年間の日時が必要であった、と考えることも出来るのではないでしょうか。

清水唯一朗、戸ノ下達也、両先生に深く感謝を申し上げますとともに、このような貴重な発表の機会を与えていただきました横浜ユーフォニアム合奏団の皆様、演奏会にお越しいただきまして、このような拙い文章を最後まで我慢強くお付き合いをして頂きました皆様方に心より御礼を申し上げます。

横浜ユーフォニアム合奏団　代表　深石宗太郎



「欧州楽録」欧州楽器名称
ユーホー子ン（ユーホーネン）



「明治九年天長節書類」欧州楽役割
ヒー、フラット、イウフヲニアン（フは小文字）

参考文献

「海軍軍楽隊」楽水会編　国書刊行会　１９８４年

「陸軍軍楽隊史」山口常光　三青社　昭和４３年

「洋楽導入者の軌跡」中村理平　刀水書房　１９９３年

「御沙汰留」雅楽局　宮内公文書館蔵　自明治３年　至明治１２年

「欧州楽録」式部職　宮内公文書館蔵　自明治７年　至明治８年

「天長節書類」式部職　宮内公文書館蔵　明治９年

「西郷隆盛惜別譜」横田庄一郎　朔北社　２００４年

「日比谷公園音楽会のプログラム」谷村政次郎　つくばね舎　２０１０年

「概説・日本の近現代史に息づく吹奏楽」戸ノ下達也　横浜ユーフォニアム合奏団蔵　２０２１年

「日本におけるユーフォニアムの歴史」深石宗太郎　洗足論叢　２００７年

「明治～昭和初期における国産金管楽器についての考察」深石宗太郎　洗足論叢　２００８年

「第二次世界大戦と戦後復興期における日本のユーフォニアムについての考察」深石宗太郎　洗足論叢２００９年

「音大卒業生によるユーフォニアム　デビューコンサート１」プログラム　１９８３年3月１０日　石橋メモリアルホール

「ニューグローブ音楽辞典（英語）」